

2012年12月25日・しんぶん赤旗「詩壇」欄では

くにさださんの仕事

くにさだきみ詩集『死の雲、水の国籍』（コールサック社）は福島原発事故をテーマとしているが、そこに収められている、戦時下の、また、敗戦直後の日本を描いた作品が、そのテーマに深い陰影を刻んでいる。

かつて、くにさださんは、空母ミッドウェーの停泊する横須賀港を「ミッドウェーのラブホテル」と呼んで、短い詩でその本質を看破した。1984年のことである。憤りを伝えようとして力を込めると、表現が危うさを取りこんでしまうことがあるが、くにさださんは、おそれることなく力込めて、その危うさを詩の衝撃力とした。そうして、私たちの生を不当に圧するものに、異議をととなえ、揺るぎない抵抗の意志を示し続けた。新詩集では、それがいっそう確かな態度、思想として伝わってくる。

それだけに、あとがきのなかのくにさださんの言葉は重い。

〈戦後の一瞬、透きとおる青空の下で空き腹を抱え、私たちは自由や平等、そして何よりも平和を希求した。あれほど希求したのに平和も平等も、生涯にわたって抱きとる日はなかった気がする〉

いまを生きているひとが「生涯にわたってなかった」と断念しているかのように書く。読後、しんと寂しいのは、多くのひとが心の奥底にしまいこんでいる思いが、そこであらわになっているからだろう。

12月はその言葉を胸に抱いて暮らした。早朝に目覚めて、もう眠ることができなかった、衆院選の投票日の翌朝も、私はその言葉のかたわらにすわり、人間の生涯を思った。くにさださんの圧倒的な詩の歳月を思った。希求しても抱きとることのできないものばかり。だから、詩を抱いているのだった。（草野信子・詩人）

と紹介されています。